

# 公 民 [ 倫 理 ] (100 点 50 分)

2020年7月21日(木)1限 実施  
前期②考査  
千葉県立長生高等学校 第3学年 全組  
Edited by K.Kataoka

## 注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 解答用紙はマークシート式です。
- 3 受験番号はアルファベットを数字に直し、次の例のように5桁で記入してマークを忘れないこと。  
例 3年D組1番 → 30401
- 4 試験中に解答用紙の不足、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰って復習をするとともに、答案返却の際に持参すること。

# 倫 理

(解答番号 [1] ~ [50])

第1問 次の文章を読み、下の問い(問1~問8)に答えよ。(配点 30)

紀元前4世紀後半、[ 1 ]の世界帝国の建設とともに、地中海世界は東西文化の交流するヘレニズムの時代に入り、ポリスという政治体制は崩壊していった。このころから、ポリスを中心とする考え方も徐々に影をひそめ、かわってポリスにしばられず、個人の[ 2 ]的平安に幸福を求める思想が登場した。

その一つに、(a) エピクロス派の思想がある。この派の祖であるエピクロスは、個人の幸福は快楽を得ることによって実現するという快楽主義を説いた。彼の求める快楽とは、一時的に感じられるだけの快楽ではなく、永続的な[ 3 ]であり、それは必要最小限の欲求をみたましながら、徳にしたがって生きることによって実現するとした。

同じころ、(b) キプロスのゼノンを創始者とする(c) ストア派の思想が登場し、人間の幸福は、自然本性にしたがって生きることにあると主張した。彼らによれば、人間の本性はもともと宇宙全体をつらぬく理性(ロゴス)によって支配されているが、さまざまな[ 4 ]がその理性にしたがうことを妨げる。したがって幸福の実現のためには、「情念に支配されない状態」をめざす必要があるとした。このような考え方は、禁欲主義とよばれ、理性による幸福を追求したものであった。また宇宙をつらぬくロゴスに人間は平等にあずかることができるという思想は、[ 5 ]という考え方につながり、さらに(d) 自然法の思想にも影響をあたえている。ローマ帝国の時代に活躍した(e) エピクテトス、(f) セネカ、そして皇帝(g) マルクス=アウレリウスらもストア派に属する。

紀元3世紀にはプラトンの哲学をあらためて継承しようとする人々も登場した。[ 6 ]から始まるこのような人々の思想は新プラトン主義とよばれる。彼らによれば、究極原因である一者からの[ 7 ]によって全世界は構成される。一者のような超越的な原理を認める新プラトン主義は、キリスト教思想に大きな影響をあたえた。

問1 文章中の空欄[ 1 ]~[ 7 ]に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①~④のうちから一つずつ選べ。

- [1] [ ① フィリッポス                      ② セレウコス  
          ③ アレクサンドロス              ④ プトレマイオス

- [2] [ ① 内面                                      ② 本質  
          ③ 集団                                      ④ 表面

- [3] [ ① アタラクシア                              ② アパテイア  
          ③ アウタルケイア                      ④ アノミー

- [4] [ ① プシュケー                              ② パトス  
          ③ ピュシス                              ④ ノモス

- [5]      [ ① 世界市民主義                  ② 個人主義  
            [ ③ 共同体主義                  ④ 懐疑主義

- [6]      [ ① プロティノス                  ② アナクサゴラス  
            [ ③ パイドロス                  ④ アリストファネス

- [7]      [ ① 流出                                  ② 創造  
            [ ③ 発生                                  ④ 生成

問2 下線部(a)に関して，次のエピクロスの言葉の空欄 [8] に入る語として最も適当なもの，下の①～④のうちから一つ選べ。

また，死はわれわれにとって何ものでもない，と考えることに慣れるべきである。と言うのは，良いものと悪いものとはすべて [ 8 ] に属するが，死は [ 8 ] の欠如だからである。それゆえ，死がわれわれにとって何ものでもないことを正しく認識すれば，その認識はこの可死的な生を，かえって楽しいものとしてくれるのである。

エピクロス「メイノケウス宛の手紙」

- ① 善      ② 感覚      ③ 運命      ④ 神

問3 下線部(b)に関して，ゼノンについての説明の中の空欄 [ 9 ] に入る最も適当な語を，下の①～④のうちから一つ選べ。

ギリシアの哲学者，ストア派の祖。キプロスのゼノン，キティオンのゼノンともいわれる。若いときアテネを訪れクセノフォンの『ソクラテスの思い出』プラトンの『ソクラテスの弁明』を読む機会を得てソクラテスの人格に深く影響された。キュニコス派のクラテス，メガラ派のスティルポン，アカデメイアのクセノクラテス，ポレモンに師事したのちストア・ポイキレに学校を開く（前 300 頃）。その節欲が諺として語られるほど彼の態度は厳格であり，質素で忍耐強い生活は有名であった。彼は哲学を論理学，自然学，倫理学の三つに分け，[ 9 ] 学が中心であり，人生の目標とすべき幸福は宇宙を支配する神の理性に従うことであり，もってアパテイアの境地にいたることであると説いた。論理学，自然学，倫理学，修辞学について多くの論文を書いたが現在は引用による断片が知られるのみである。

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典より

- ① 論理      ② 倫理      ③ 哲      ④ 自然

問4 下線部(c)に関して、次の夏目漱石『それから』からの引用文の下線部に見られるストア派の思想の用語を意味する説明として、最も適当なものを下の①～④のうちから一つ選べ。[10]

代助は平岡が語ったより外に、まだ何かあるに違ないと鑑定した。けれども彼はもう一歩進んであくまでその真相を研究するほどの権利を有(も)っていないことを自覚している。またそんな好奇心を引き起すには、実際あまり都会化し過ぎていた。二十世紀の日本に生息する彼は、三十になるか、ならないのに既に nil admirari の域に達してしまった。彼の思想は、人間の暗黒面に遭遇して喫驚するほどの山出ではなかった。彼の神経はかように陳腐な秘密を嗅いで嬉しがるように退屈を感じてはいなかった。否、これより幾倍か快よい刺激でさえ、感受するを甘んぜざる位、一面からいえば、困憊していた。

- ① 平静心    ② 好奇心    ③ 自足心    ④ 不動心

問5 下線部(d)に関して、次のストア派の思想家たちについての説明を読み、自然法の思想を述べている人物を、下の①～④のうちから一つ選べ。[11]

さらに、徳は、幸福であるためには、それだけで十分なもの（アウトルケース）であるというのが彼らの考えである。これはゼノンが述べていることであるが、ヘカトンも『善について』第二巻で述べていることである。

また、クレアンテスとその一門の人たちが言っているように、徳は不断に活用すべきであるというのが彼ら（ストア派）の説である。なぜなら、徳は失われるものではないし、また、良き人は完全な状態にある自分の魂をいつも働かせているのだからと。

さらに、クリュシッポスが『美しさ（道徳的な立派さ）について』の中で述べているように、正しさは、法や正しい理法がそうであるように自然の本来（ピュシス）によってあるのであって、人為・約束（テシス）によってあるのではない、というのが彼らの説である。      ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』第7巻第1章

- ① ゼノン    ② ヘカトン    ③ クレアンテス    ④ クリュシッポス

問6 下線部(e)について、エピクテトスの思想についての説明を読み、意志的なものとして最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[12]

エピクテトスは、すべてのものを意志的なものと意志外（＝外界）のものに分ける。前者はわれわれの権内にあつて自由になるが、後者はわれわれの権内になく、したがって自由にならない。われわれの左右しうるものには責任があるが、そうでないものには責任がない。だから彼は、外的なものには大胆であれといい、われわれの権内にあるものについては慎重であれとか、細心であれというのである。これはエピクテトス哲学において、極めて大事な行為の基準である。

- ① 病気になること  
② 教養を得ること  
③ 過去の出来事  
④ 批判されること

問7 下線部 (f) に関して、次の文章は、人生の短さを論じたストア派の思想家セネカが今という時の価値について述べたものである。その内容の説明として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[13] 2018年センター追試験

ところで、自分には予見の能力があると言って自慢する者たちの判断ほど軽薄なものがあり得ようか。人は、より善く生きようとして、なおさらせわしなく何かに忙殺される。……人は、これを、次にはあれを、と考えをめぐらせ、遠い将来のことにまで思いを馳(は)せる。ところが、この先延ばしこそ生の最大の浪費なのである。先延ばしは、先々のことを約束することで、次の日が来るごとに、その一日を奪い去り、今という時を奪い去る。生きることにとっての最大の障害は期待をもつこと、つまり、明日という時に依存し、今日という時を失うことである。君は運命の手中にあるものをあれこれ計画し、自分の手中にあるものを喪失している。君はどこを見つめているのか。どこを目指そうというのであろう。来るべき未来のものは不確実さのなかにある。直ちに生きよ。

(『生の短さについて』より)

- ① 人間は、今日できることは明日でもできると考え、怠惰な毎日を過ごしがちであるが、それは時間の浪費につながる愚かな行為であるから、将来の計画をしっかりと立てたうえで、今を大切に生きなければならない。
- ② 人間は、善き生のために未来のことを考え、様々な計画を立てるあまり、この今という時の価値を見失いがちであるが、自分が本来は手にしている今という時を真剣に生きることが大切である。
- ③ 人間にとって、目前の事柄に追われ、多忙な毎日を送ることは、長期的な視野で人生を考える時間をなくすことであるから、目前の事柄ではなく、遠い将来に目を向けて人生の計画を練ることを優先すべきである。
- ④ 人間にとって、未来の運命は完全には予測できないが、自分が手にしてきた過去の経験から未来を推測することはできるのだから、善き生のために今という時をいかに過ごすべきかを真剣に考える必要がある。

問8 下線部 (g) に関して、次の文章は、マルクス・アウレリウスの著作からの引用である。その著作名として正しいものを [14] に選び、空欄 [15] に入る適当な語を選べ。

人間の生命にあっては、その歳月は天であり、肉体のことは全て流れる河であり、魂のことは夢であり、煙である。人生は戦いにし、過客の一時の滞在であり、後世の評判も忘却に過ぎない。しからば、われわれを護り導きうるものは何か。ただ一つ、哲学のみ。

そしてあらゆる場合に [ 15 ] はすべての生物の構成要素の分解に他ならずとて、心温かくそれを待ち迎える。この事態になんの恐れることもないならば、なぜに人は万物と変化に対し、上目遣いに胡散臭い見方をするのか。[ 15 ] は自然の本性にかなったものではないか。自然の性にかなって、しかも悪いというものは、絶対に存しないのである。

[14] ① エンネアデス ② スキピオの夢 ③ 自省録 ④ 形而上学

[15] ① 快 ② 苦 ③ 生 ④ 死

第2問 次の文章を読み下の問い(問1～問9)に答えよ。(配点 26)

イスラエル人の聖典である『旧約聖書』の[ 16 ]によると、紀元前13世紀に彼らの一部が移住先の[ 17 ]から、(a) モーセにひきいられて再びカナンへと脱出した。その途中、神は彼らを救出するとともに、[ 18 ]においてモーセを通じて (b) 十戒をさづけ、これを守ることを要求したという。彼らは、これをヤハウエとイスラエルの民との契約であると受けとめ、神を信じ、十戒を中心とする (c) 律法にしたがうかぎり、民族の救済と繁栄が約束されると理解した。

その後イスラエル人は、カナンの地において (d) ダヴィデ王や (e) ソロモン王のもとで王国として栄えるが、神と契約した民(選民)としての自覚を失いつつあった。そのようななかで、(f) 預言者とよばれる人々が登場し、当時の社会と宗教のあり方を批判した。しかし、その批判も受け入れられることなく、やがて王国は南北に分裂したのち、ともに滅ぼされ、とくに紀元前6世紀には、南の[ 19 ]王国の多くの人々が捕虜として連行された。多くの預言者たちは、国を失うことになったのは律法を守らなかったからであると語り、しかし神は、イスラエル人を許し、メシアを世に送るだろうと語った。こうして人々は律法を守り、いつの日かイスラエル人に栄光がもたらされることを期待し、メシアを待望しながら苦難を耐え忍んだ。

問1 文章中の空欄[ 16 ]～[ 19 ]に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- [ 16 ] [ ① 申命記                      ② 福音書  
          [ ③ 出エジプト記            ④ 創世記
- [ 17 ] [ ① ハラン                        ② バビロン  
          [ ③ エリコ                     ④ エジプト
- [ 18 ] [ ① 葦の海                        ② カナン  
          [ ③ シナイ山                   ④ アレクサンドリア
- [ 19 ] [ ① 新バビロニア                ② ユダ  
          [ ③ イスラエル                 ④ アッシリア

問2 文中の下線部(a)に関して、モーセについての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[20] 2006年センター本試験

- ① 王の宮殿で育てられたが、荒野で啓示を受け、奴隷となっていた同胞を約束の地へと向かわせ、神から授けられた掟を人々に示した。
- ② 異民族による支配は、多神教の影響による宗教的な墮落や貧者を虐げる社会的不正に対する神の罰だとして、神の裁きと救済を説いた。
- ③ 山の洞窟で神から啓示を受け、預言者として、礼拝や喜捨などの宗教的義務を果たし敬虔な信仰生活を送るべきことを説いた。
- ④ 王子として生まれ育ったが、死や病気に直面する人間の苦しみについて思い悩み、王家を出て真理に達し、人々にそれを示した。

問3 文中の下線部(b)に関して、十戒を説明する文中の空欄【A】【B】に入る最も適切な語の組み合わせを、次の①～④のうちから一つ選べ。[21]

神はモーセにみずからがイスラエルの民の神ヤハウェであることを告げ、神を愛しその戒めを守る者には千代に及ぶまで恩恵を施すと約して、神に対する愛について (1) ヤハウェのほかにもものをも神としないこと、(2) 主なる神の名をみだりに呼ばないこと、(3) 【A】を記憶してこれを聖とすること、また他人に対する愛について、(4) 父母を敬うこと、(5) 殺さないこと、(6) 姦淫しないこと、(7) 【B】こと、(8) 偽証しないこと、(9) 他人の妻を恋慕しないこと、(10) 他人の所有物を貪らないことの 10 の戒めを示された。  
(出エジプト記 20 章)

- ① 【A】 律法 【B】 盗まない                      ② 【A】 律法 【B】 酒を飲まない  
③ 【A】 安息日 【B】 盗まない                      ④ 【A】 安息日 【B】 酒を飲まない

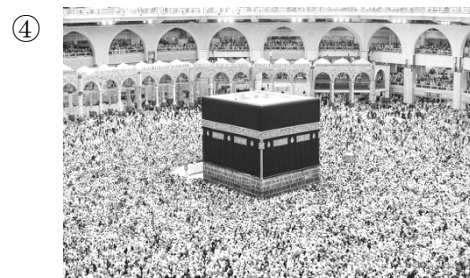
問4 文中の下線部(c)に関して、律法を意味するヘブライ語を、次の①～④のうちから一つ選べ。[22]

- ① セフィロト      ② トーラー      ③ カバラ      ④ タルムード

問5 文中の下線部(d)に関して、ダヴィデについての記述中の空欄 [23] に入る語として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

ベツレヘムの無名の羊飼いにすぎなかった少年ダヴィデは、ペリシテ人の巨人ゴリアテを投石器で倒したことでサウル王に認められ、楽士としてその寵愛を受けた。その後も数々の武勲をたて、王女ミカルと結婚したが、しだいに王のねたみを買うようになったため、争いを避けて国外へ出た。やがてサウルが戦死したため推挙されて王位につき、エブス人から [ 23 ] を奪って首都とし、ここに団結のしるしである「神の箱」(契約の櫃) を移して、全部族への支配権を打ち立てるとともに信仰の中心を定めた。

問6 文中の下線部(e)に関して、ソロモンが建てた神殿のあった場所として最も適切な写真を、次の①～④のうちから一つ選べ。[24]



問7 文中の下線部(㊦)に関して、旧約の預言者の名前として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[25]

- ① アナニア ② エレミヤ ③ ラザロ ④ ステファノ

問8 次の旧約聖書の引用文中の空欄 [26] に入る人名と、その出典 [27] として最も適当なものを、下の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

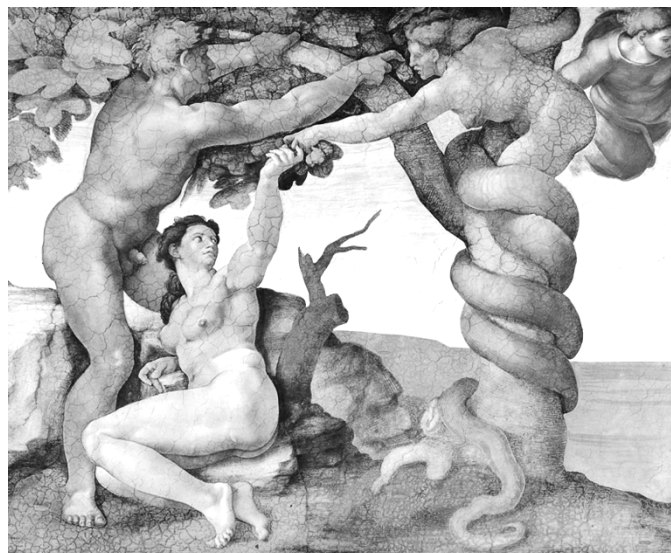
[ 26 ] が父のアブラハムに、「お父さん」と呼びかけると、彼は、「息子よ、何か」と答えた。そこで [ 26 ] は、「火と薪はここにあります、焼き尽くすいけにえにする小羊はどこですか」と尋ねた。するとアブラハムは、「息子よ、焼き尽くすいけにえの小羊は神ご自身が備えてくださる」と答え、二人はさらに続けて一緒に歩いて行った。神が示された場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ、息子 [ 26 ] を縛って祭壇の薪の上に載せた。アブラハムは手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。すると、天から主の使いが呼びかけ、「アブラハム、アブラハム」と言った。彼が、「はい、ここにおります」と答えると、主の使いは言った。「その子に手を下してはならない。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが今、分かった。あなたは自分の息子、自分の独り子を私のために惜しまなかった。」アブラハムが目を上げて見ると、ちょうど一匹の雄羊がやぶに角を取られていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕らえ、それを息子の代わりに焼き尽くすいけにえとして献げた。

- [26] ① イサク ② ヤコブ ③ カイン ④ ヤフェト

- [27] ① 民数記 ② 出エジプト記 ③ 創世記 ④ レビ記

問9 下の旧約聖書をテーマにした絵を描いた人物として、最も適当なものを次の①～④のうちから一つ選べ。[28]

- ① カラヴァッジョ ② ミケランジェロ  
③ ラファエロ ④ レオナルド・ダ・ヴィンチ





第3問 次の文章を読み下の問い（問1～問7）に答えよ。（配点 24）

イエスの生年の確定はむずかしい。「マタイ福音書」によると、彼はヘロデ大王の統治下（前37～前4）に生まれたが、「ルカ福音書」によると、その誕生はローマ初代皇帝〔29〕による人口調査の勅令発布の年と結び付けられている。一般にこの人口調査は紀元後6～7年に実施されたと考えられているが、勅令はすでに紀元前7年に発布されていたと推測する学者もいる。〔30〕をイエスの出生地とする「マタイ福音書」と「ルカ福音書」の叙述は、メシアは〔30〕から現れるという、ユダヤ人の期待に基づく物語であるかもしれない。古い伝承によると、イエスは「ナザレのイエス」とよばれているので、〔31〕のナザレの出身であったと推測される。父はヨセフ、母はマリア。兄弟たちや姉妹たちもいた。「マタイ」「ルカ」の両福音書の誕生物語では、(a) イエスを処女マリアから生まれたとして、イエスの聖性の根拠としている。紀元28年ごろヨルダン川のほとりで〔A〕の洗礼運動が始まると、彼から洗礼を受け、やがて弟子たちを集めて宣教活動を開始した。イエスの活動のおもな舞台は〔31〕である。彼は民衆の間で教え、病人を癒し、悪霊祓いを行うが、後述するように、ユダヤ教の伝統的教えに対して自由にふるまったため、律法学者や(b) パリサイ人などユダヤ教指導者の反感を買った。

最後に、過越祭を祝うためエルサレムに上京（日曜日）、そこでユダヤ教指導者たちと論争し、弟子たちを教えるが、その週の木曜日に十二弟子と過越の食事（最後の晩餐となった）をとともにし、その一人である〔32〕に裏切られ、ユダヤの最高法院（サンヘドリン）によって逮捕、審問され、流神の罪で死刑の判決を受けた。しかし当時ユダヤ人は死刑執行権をもたなかったため、イエスをローマの総督〔33〕に反ローマ運動の指導者として訴え、死刑を強く要求した。福音書によれば、〔33〕はイエスにその罪をみいだすことができなかったが、ユダヤ人の声に負け、彼を「〔34〕」すなわち反ローマ的メシア僭称者として、エルサレム郊外のゴルゴタの丘で十字架につけた。このことから、イエスは実際に反ローマ的暴力革命の指導者であったと想像する学者もいるが、福音書によれば彼の運動は政治的でも軍事的でもない。しかしイエスのように、この世界の終焉を意味する神の国の宣教と治癒活動によって多くの抑圧された貧しい民衆をひきつける者は、支配者にとって好ましくない人物に違いなかった。しかもイエスのもとに集まる民衆のなかには、彼の意に反して民族的メシア王国の実現を期待する者もいたため、支配層はそこにいっそう危険を感じたことであろう。そのためにイエスの処刑には福音書が報告する以上に、ローマ人が積極的に関与したかもしれない。

処刑の日は〔35〕曜日であったが、「マタイ」「マルコ」「ルカ」の3福音書によると過越祭の日である。だが「〔36〕」の福音書によるとその前日である。いずれが正確であるかは今日なお議論されている。後者をとるならば、紀元30年4月7日の可能性が生じてくる。この場合イエスの活動期間は、2年余りであったと考えられる。

「イエス・キリスト」『日本大百科全書』（川島貞雄）

問1 文章中の空欄〔29〕～〔36〕に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- 〔29〕
- |   |    |   |              |             |
|---|----|---|--------------|-------------|
| 〔 | 29 | 〕 | ① ネロ         | ② コンスタンティヌス |
|   |    |   | ③ ディオクレティアヌス | ④ アウグストゥス   |

- [ 30 ] [ ① アリマタヤ            ② エマオ  
          [ ③ ベツレヘム        ④ エリコ
- [ 31 ] [ ① ガリラヤ             ② ユダヤ  
          [ ③ フェニキア        ④ シリア
- [ 32 ] [ ① アンデレ             ② ユダ  
          [ ③ トマス             ④ ペトロ
- [ 33 ] [ ① アグリッパ           ② カリギュラ  
          [ ③ ピラトウス        ④ ロンギヌス
- [ 34 ] [ ① 神の子                ② 革命家  
          [ ③ ユダヤ人の王      ④ キリスト教開祖
- [ 35 ] [ ① 日                     ② 木  
          [ ③ 土                    ④ 金
- [ 36 ] [ ① ペトロ                ② トマス  
          [ ③ ユダ                ④ ヨハネ

問2 文章中の人物 [A] についてのマタイ福音書による記述の中の空欄 [37] に入れるのに最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

その頃、洗礼者 [A] が現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝えて、言った。「悔い改めよ。天の国は近づいた。」預言者イザヤによって、／「荒れ野で叫ぶ者の声がある。／『主の道を備えよ／その道筋をまっすぐにせよ』』と言われたのは、この人のことである。[A] は、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、ぼったと野蜜を食べ物としていた。すると、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々が [A]のもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼( [ 37 ] )を受けた。

- ① ベネディクト    ② サクラメント    ③ ホスチア    ④ バプテスマ

第4問 次の文章を読み下の問い（問1～問6）に答えよ。（配点 18）

イエスの言動は、(a) 律法の厳密な解釈や形式的な遵守を主張する人びとに対する批判をふくんでいたため、ユダヤ教の指導者たちの反発を招いた。彼らは、イエスをローマに対する反逆者として告発し、(b) 十字架上の刑に処した。イエスの死後、彼こそ神が人間に遣わしたメシアであると信じる人びとは、イエスの復活を信じ、(c) ペテロを中心として教団・教会（エクレスシア）を形成した。これが原始キリスト教の成立である。彼らは、広くギリシアやイタリアにまで伝道をおこない、キリスト教の発展の基礎を築いた。

(d) パウロは、ローマの市民権をもつユダヤ教徒として、最初はキリスト教徒の迫害に加わっていた。しかし、旅の途中で神の啓示をうけた彼は、キリスト教へと回心（改宗）し、(e) 異邦人への伝道に力をつくすようになった。キリスト教は、皇帝崇拝を強要するローマ帝国のきびしい弾圧を受けながらも、民衆の中に深く浸透し、4世紀末にはついにローマ帝国の国教となった。この間、2世紀までに、イエスの伝記である四福音書や使徒たちの手紙など27巻からなる『新約聖書』がまとめられた。その後、多くの異端論争や異教との対立を通して、信仰や教会のあり方（教義）が体系づけられていった。その理論的支柱となったのが、アウグスティヌスに代表される (f) 教父哲学である。

(g) アウグスティヌスは、いくつかの思想を遍歴したあと、[ 38 ]の思想に出会った。その思想をキリスト教に導入した彼は、生まれながらに罪を負っている人間を救うのは神の恩寵のみだと考え、教会こそがその救いを与える神の国の代理人であると説いた。そして、彼は、パウロによって唱えられた信仰・[ 39 ]・愛というキリスト教の三元徳をギリシアの四元徳の上位に位置づけるとともに、神の絶対性と教会の権威を基礎づけた。

中世の西ヨーロッパ社会がローマ=カトリック教会の支配下におかれていた11世紀ごろ、キリスト教哲学（スコラ哲学）内部で、理性と信仰は調和するかしらないかをめぐって論争がおこった。(h) この論争の中から後年有力な説となったのが二重真理説である。これは、理性が正しいとする真理と、信仰の立場で正しいとされる真理とは、たとえ矛盾しているとしても、それぞれに正しいという考え方である。けれども、これはキリスト教の立場からは認めがたいものであった。

スコラ哲学の大成者ともいえる (i) トマス=アキナスは、この問題に対して独自の解決をはかろうとした。彼は、「自然の事物は、人間の理性が見習うべき神の理性の力によって秩序づけられている」と語り、理性にもとづく真理の探究は、神が創造した自然の秩序の探究にほかならないと考えた。信仰の優位を前提として、理性と信仰の調和をはかろうとしたのである。

その後、ロジャー=ベーコンや(j) ウィリアム=オッカムらによって、理性と信仰の分離が主張され、そこから近代科学への道が開かれていった。

問1 文章中の空欄 [ 38 ]～[ 39 ]に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- [38] 

〔	① 新プラトン主義	② ゴロアスター教
	③ アリストテレス	④ マルキオン

- [39] 

〔	① 勇気	② 知恵
	③ 希望	④ 正義

**問2** 下線部(a)に関して、イエスが安息日に病人を癒そうとしたことの説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[40] 2019年センター本試験

- ① イエスは、安息日に関する律法からあえて逸脱することで、律法が人々の間で形式的にしか守られていないことを批判し、神に対して忠実であることの本来の意味を明らかにしようとした。
- ② イエスは、安息日に関する律法からあえて逸脱することで、律法が神の意志そのものとは関係のないものであることを明らかにし、あらゆる律法が不要な状態を理想とした。
- ③ イエスは、安息日に関する律法を厳格に守り通すことによって、律法に則った正しい信仰のあり方を、自らの行いという実例を通して周囲の人々に示そうとした。
- ④ イエスは、安息日に関する律法を厳格に守り通すことによって、人々が重視していた律法と、人にしてもらいたいと思うことを人にもすべきだとする黄金律とが一致することを示そうとした。

**問3** 下線部(b)に関して、十字架状で死んだイエスの贖罪の説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[41] 2016年センター追試

- ① イエスの贖罪とは、ユダヤ教における贖罪の考え方と異なり、犠牲を伴わずに人々の罪の赦(ゆる)しを得るためのものである。
- ② イエスの贖罪とは、神の子の死によって、人の力だけでは逃れられない罪から人々を解放するためのものである。
- ③ イエスの贖罪とは、ユダヤ教における最後の預言者として、この世の終末の時に人々の罪を清算するためのものである。
- ④ イエスの贖罪とは、神が与えた律法そのものを無効とし、新たな愛の掟(おきて)によって人々の罪を浄(きよ)めるためのものである。

**問4** 下線部(c)に関して、ペテロが宣教を始め教会が成立したとされる出来事として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[42]

- ① パウロの回心 ② 最後の晩餐 ③ キリストの昇天 ④ 聖霊降臨

**問5** 下線部(d)に関してパウロの思想の説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[43] 2018年センター本試験

- ① 人間は、善を望んでいるはずなのに、望まない悪を行ってしまう。そこからの救済は、キリストへの信仰によるほかなく、人類全体の罪を担ったキリストに従い、私たちもまた、隣人への愛を実践すべきである。
- ② 人間は、善を望んでいるはずなのに、望まない悪を行ってしまう。そこからの救済は、キリストへの信仰によるほかなく、神と契約したキリストのように、私たちもまた、神との契約である律法を正しく遵守すべきである。
- ③ 人間は、肉体の情欲に引きずられ、望まない悪を行ってしまう。そこから救済されるためには、自らの運命を受け入れたキリストのように、私たちもまた、罪のない本来の自己を再発見し、それを受け入れるべきである。
- ④ 人間は、肉体の情欲に引きずられ、望まない悪を行ってしまう。そこから救済されるためには、苦しむ人々を癒したキリストに従い、私たちもまた、善行を積むことによって、神から義とされるよう努力すべきである。

問6 下線部(e)に関して、ここで言われる異邦人の解釈として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 [44]

- ① ユダヤ教徒ではない人      ② キリスト教徒ではない人  
③ ローマ人ではない人      ④ ギリシア語を話さない人

問7 下線部(f)に関して、教父についての記述中の空欄 [45] に入る最も適当な語を、下の①～④のうちから一つ選べ。

教父はおおかた、古代ギリシア・ローマの文芸に通じた人々で、いずれも、古代文明の遺産、とくに、詩人や哲学者の説とキリスト使徒の教えの間にどのような関係があるかという問題に、大きな興味を抱いていた。キリスト教は初め、キリストの教えの唯一性によって、古代異教文明とはまったく異質の源泉に基づく宗教として登場したが、しだいに古代異教世界の内部で教勢を伸展するにしたがい、古代文明、とくにギリシアの哲学思想との対決を余儀なくされた。この要求を満たした者が教父であって、教父によって、古代文明のうちの不滅な価値を有するものはキリストの教えを準備し、人々を真理そのものであるキリストへ導くものとして、キリスト教思想のうちに摂取された。他方にキリスト教の教説そのものは、究極においては [ 45 ] による解明を許さぬ神秘を含むとしても、なお、それが理性の把握を許す範囲では教説それ自身もなんらかの [ 45 ] 的な構造を備えるようになった。ここにキリスト教思想は、一つの総合的な世界観として形成され、この基礎のうえに中世のキリスト教神学の体系が、構築された。

- ① 信仰      ② 理性      ③ 異端      ④ 感覚

問8 下線部(g)に関して、次の文章は、アウグスティヌスが神のもとでの憩いについて述べたものである。その内容の説明として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

[46] 2017年センター追試験

私たちの汚れた霊は、(この世に)関心をもつ愛によって下の方へ流れ落ちていきますが、あなた(神)の聖なる霊は、確かな愛によって私たちを上の方に引き上げてくれます。……あなたの賜(たま)物(もの)(である聖なる霊)のなかで私たちは憩います。そこで私たちはあなたを楽しみます。私たちの憩いは私たちの場所です。愛が私たちをその場所へ引き上げてくれます。……物体は自らの重さによって自分の場所に向かおうとします。……火は上に、石は下に向かおうとします。それらは自分の重さによって動かされ、自分の場所を求めます。……私の重さは私の愛です。私はそれによって動かされ、それが動かすところへ運ばれます。私たちはあなたの賜物によって点火され、上に運ばれます。(点火された)私は燃え、上に上昇します。(『告白』より)

- ① 人間は、自分自身の重さをもっており、その重さによって上にも下にも向かう。神の賜物により火を点(つ)けられて燃え上がると、人間は、愛によって上に引き上げられ、神の賜物のなかで憩うことになる。
- ② 人間は、火や石のように、自分自身の重さをもっており、向かうべき方向は最初から決まっている。そのため、どんな人間でも、下に落ちることなく、愛によって神へ運ばれて、憩うことになる。
- ③ 物体は、自分の重さをもっており、おのおの向かう方向が決まっている。だが、人間は、自分自身の愛の力によって自らを上へ運び、私たちの場所である神の賜物のなかで憩うことになる。
- ④ 物体は、自分の重さをもっており、すべて下へ向かう。同様に人間も、自らの重さによって下へと落ちながらも、自分の場所に憩うことで、神へ向かう愛を得て、上に引き上げられることになる。

問9 下線部(h)に関して、次の文中の空欄[47]に入る人名として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

理性と信仰のこうした安定した関係は、いわゆる12世紀ルネサンスで危機を迎える。それまでキリスト教との関連で考慮されていた哲学がプラトン(ないし新プラトン主義)であったのにたいして、レコンキスタ(スペインでの領土回復)運動、十字軍遠征によるこの第二の古典復興で顔を見せたのは[ 47 ] 哲学だったからである。スコラ哲学の第二の画期、13世紀のいわゆる盛期スコラ哲学はここに始まる。キリスト教との矛盾がさげられない[ 47 ]の哲学、たとえば「世界の永遠性」や「知性単一説」をどう理解するかが最大の課題になった。ここでアンセルムスの課題が、また新たな解決を求められることになったのである。

イスラーム世界でキリスト教の教義を顧慮せずに[ 47 ]を解釈したアヴェロエスは、[ 47 ]を人間理性の極致として賛美した。彼を信奉したのはラテン・アヴェロエス主義者たちである。彼らの場合には、キリスト教(信仰)の真理と[ 47 ]の真理(理性)が背馳することになる。この窮境にたいして彼らがとったのは、「二重真理説」であった。つまり、観点を変えればどちらも真理だということである。もちろんこれは、キリスト教の真理を脅かす異端であった。

- ① アリストテレス    ② デカルト    ③ ソクラテス    ④ ストア派

問9 下線部(i)に関して、トマス・アクィナスに関する記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 [ 48 ] 2003年センター追試験

- ① 信仰と理性は相互に分離された異質な領域に属しており、神にかかわる信仰的実践を哲学によって基礎づけることはできないとした。
- ② 信仰と理性の区別を体系的に論じて、信仰の優位のもとで両者の統合を試み、倫理思想に関しても自然的徳は神の恩恵によって完成されるとした。
- ③ 一切は神から必然的に生じるものであり、倫理的問題に関しても、永遠の相のもとで事物を考察することによって判断されなければならないとした。
- ④ 人間の救済と滅びは神によってあらかじめ決定されており、人間は合理的で正しい行為によってもその決定を変更することはできないとした。

問10 下線部(j)に関して、ウィリアム・オッカムに関する記述の中の空欄 [49] [50] に入る語として最も適当なものを、下の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

イギリスのスコラ哲学者。オッカムのウィリアムともよばれる。イングランドのオッカムに生まれる。若くしてフランシスコ会の修道僧となり、オックスフォードに学び、やがて神学を講じたが、異端の嫌疑をかけられ、修道会の貧困の教説と教皇権の問題も加わって、破門されつつも教皇ヨハネス 22 世およびベネディクトゥス 12 世（在位 1334～1342）に抵抗した。彼の哲学と神学には論理的観点が貫かれており、『論理学大全』に代表されるその立場は [ 49 ] 論と目される。彼は、ことばを文字、音声、概念に区別したうえで、普遍は概念としてのことばであるとする。音声および文字が取り決めによって成立した記号であるのに対し、概念は理解の働きとして事物の自然的な記号である。「人間」はあくまでも個物の記号であるが、かならずしも個物を代表する（指す）とは限らず、「人間は名詞である」においては音声を、「人間は種である」においては [ 50 ] を代表する。実在は個物のみであり、個物を認識する直覚知こそが明証的知識の基礎となる。この考えは、多くの神学的命題を信じられるべきものとし、これと経験的知識との分離を促し、近世の自然科学的思想の先駆となった。「オッカムの剃刀(かみそり)」とは、彼が議論にしばしば用いた「必要なしに多くのものを定立してはならない」という規則のことである。

ウィリアム・オッカム『日本大百科全書(ニッポニカ)』[清水哲郎]

[49] ① 実念 ② 仮現 ③ 唯名 ④ 単性

[50] ① 音声 ② 文字 ③ 名前 ④ 概念

これで問題は終わりです。